

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3 新年のごあいさつ
4 巳年 年男、今年もよろしくお願いします。

6 **関東地域づくり協会からのお知らせ**
第37回 道のある風景写真コンクール

8 **公益助成事業の紹介**
令和3年度～令和5年度「アスファルト舗装研究会」活動報告

10 **プロジェクトK⑤**
人々の生活を守り自然景観に調和する
新たな堰を生み出す
二ヶ領宿河原堰改築事業

14 **関東の宿場町⑩**
水戸街道 土浦宿 茨城県

16 **関東の土木遺産③**
鬼怒川発電所黒部ダム 栃木県

18 **会員のひろば**
私の趣味

19 **会員情報**
新会員紹介・お悔やみ
編集委員会だより

20 **ピックアップ 関東の「道の駅」⑧**
緊急時の拠点となる
河川防災ステーションと
一体となった道の駅
道の駅「富士川」



表紙の言葉

おおやまれい

大山礼さん（茨城大学教育学部附属小学校5年生（受賞時））

新1年生

この写真は、当協会が主催する第37回「道のある風景写真コンクール」で小学校の部金賞に選ばれた茨城大学教育学部附属小学校の大山礼さんの作品です。

「この写真は、登校時にお母さん、妹、弟と僕で通学路を歩いている時に撮影しました。弟は小学生になって、まだ数日しか経っておらず、家を出る時は、学校に行くのが不安だと言っていました。通学路で妹とジャンケン始めて、どんどん表情が明るくなり、そのジャンケンが緊張している弟を応援しているように見えました。その姿を残したいと思い、お母さんのカメラを借りて写真を撮影しました。これから印象に残る出来事を写真に残していきたいです」

理事長あいさつ 新年のごあいさつ

(一社) 関東地域づくり協会 理事長
深澤淳志



令和7年の年頭に当たり、一言ごあいさつ申し上げます。

昨年は、元日に能登半島で震度7の大地震が発生しました。8月には日向灘を震源とするマグニチュード7.1の地震が発生し、気象庁は初めて「南海トラフ地震臨時情報」を発表しました。7月から9月にかけての大雨は、全国各地に甚大な被害をもたらし、さらに9月21日には復興途上の能登半島地域を記録的な豪雨が襲いました。

巨大地震発生リスクの高まりとともに、近年では雨の降り方も集中化・激甚化しており、その原因の一つが地球温暖化といわれています。異常な高温は世界各地で記録され、世界平均気温は、観測史上最高とのこと。日本においても昨年の夏の平均気温は、平年より1.76度高く、一昨年と並び最も暑い夏になりました。

災害に際しての早急な復旧はもちろんですが、被害を最小限に抑えるためには、事前の防災対策が極めて重要です。

昨年末に成立した2024年度補正予算では、政府全体の防災・減災、国土強靱化の公共事業費として2023年度を上回る1.4兆円が確保されました。また、現在、国土強靱化基本法に基づく「国土強靱化実施中期計画」の策定が精力的に進められています。一日も早い計画の策定と、それに基づく着実な事業執行が望まれるところです。

そんな中、年末、防災・減災、国土強靱化施策推進の強力なリーダーのお一人で、当協会の会員でもある足立敏之参議院議員が急逝されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

関東地域づくり協会は、2013年4月の設立以来、今年の4月で12年目を迎えます。協会の使命は、関東地方整備局経験者を主体とする会員の皆様のご支援、ご協力のもと、安心して、いきいきと暮らせる関東地域の基盤づくりのお手伝いを行うことです。

昨年は、これまでの10年の歩みを「10年史」として取りまとめるとともに、次の10年に向けた取り組みが開始されました。

公益事業としては、6本の柱、すなわち①地域活性化事業、②防災事業、③環境保全事業、④調査研究および技術開発事業、⑤講演会等事業、⑥広報事業を中心に、各般にわたる事業を展開しています。また、協会のもつ技術・ノウハウを活かして、インフラ整備事業等の進捗管理や関係機関との調整を行う事業監理業務、公共事業の品質を確保す

るための第三者品質証明事業などを進めています。

防災エキスパートの方々には、定期点検や講習会への参加などを通じ、防災技術の研鑽や伝承に取り組んでいただいています。

また、会員有志の方を中心に発足した「関東技術継承研究会」が昨年取りまとめた「失敗から学ぶ経験集」を教材に、特に整備局の若手職員を対象にして各地で出前講座を実施しています。さらに、技術継承の第2弾として、現在「災害発生時の初期対応事例集（仮称）」の取りまとめを進めています。このような取り組みを通じて関東地方整備局OBが現役時代に経験した教訓を後輩に確実に継承していきたいと考えています。

国土の基盤づくりを通じて関東を良くしよう、日本を引っ張っていこう、幸せな社会を実現しようという誇り高き会員の皆さんの志を実現すべく、今年も新しいことへチャレンジするとともに、業務の一層の効率化や技術の研鑽、人材の確保・育成にも努めてまいります。また、会員サービスの向上と併せ、防災エキスパートをはじめとする会員の皆さんの活躍の場をさらに提供してまいりたいと考えます。

今年、2025年は、戦後80年。昭和100年の節目に当たる年です。国内外とも課題が山積しており、時代の大きな転換期のような感じです。今年は巳年です。ヘビは、脱皮を繰り返すことから「再生や変化を繰り返しながら柔軟に発展していく」シンボルだそうです。私たちもさまざまな困難を乗り越えていきたいものです。

50-50！ 見事MVPに輝いた大谷翔平選手の大活躍には日本中のファンが沸きました。大谷選手の座右の銘は、母校・花巻東高校の恩師である佐々木洋監督の教えである「①先入観は可能を不可能にする」と「②具体的に目標を立てて具体的に行動すること」であると聞きました。私たちも課題に接したとき、最初から諦めない強い気持ちをもって挑戦し続けたいものです。

昨年の定時総会においてご講演をいただいた和田秀樹先生によれば、意欲をもって挑戦する秘訣は「前頭葉」を鍛えることでした。

今年一年が平和で、皆さまにとって、明るく笑顔あふれる素晴らしい年となることを祈念し、新年のごあいさつといたします。



巳年

年男、
今年もよろしく
お願いします。

愛犬と妻に感謝

昭和28年(1953)年生まれ

金子剛さん

大日コンサルタント(株)
元常総国道事務所副所長

あけましておめでとうございます。

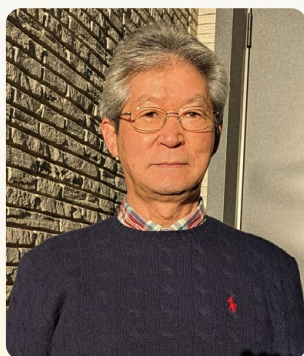
6回目の巳年を迎える歳になりました。この年齢で薬を飲まずに元気でいられるのは食事や体調に気を遣ってくれる妻のおかげだと思っています。

春から秋にかけての週末は、家庭菜園や庭の手入れ(芝刈りや草抜き)が加わり、忙しい日々を送っています。スポーツをすることが少なくなったこの年齢で、週末の作業も健康管理と思って楽しくやっています。また、気兼ねない人たちと行く月1回のゴルフも欠かせないものとなっています。

15年8か月暮らした愛犬ジャックラッセルテリアの雌犬「結」を膝の上で見送りました。

朝の散歩、寝る時も私の側にいてくれました。出勤の際の見送りと帰宅時の玄関でのお出迎え、お風呂も毎日一緒(身体拭き、歯磨き)に入り、休日のお出かけには助手席に必ず一緒にいました。ほとんど吠えることもなく静かな愛犬でした。1年程前に後ろ足の十字靭帯を断裂し、術後思うように散歩ができなくなり衰えが目立ちはじめました。今年になって気管支や内臓に疾患が見られるようになり、CT検査時には治療を施すには困難な状況でした。もっと早く気付いてあげられればと今でも悔いています。ペットロスの日々が今でも続いています。

また飼いたいと思っていますが、年齢を考えると少し難しいかもしれません。しばらくは、のんびり旅行にでも行きたいと思っています。



地域の人と交流し、 新たな人生を

昭和28年(1953)年生まれ

佐藤郁太郎さん

伊田テクノス(株)
元利根川ダム統合管理事務所長

あけましておめでとうございます。

平成26年に利根川ダム統合管理事務所長で退官し、関東地域づくり協会、関東建設マネジメントを経て現在伊田テクノスに勤務しています。

思えば、昭和47年に群馬の高校を卒業後、文部省東京工業大学に採用となり、仕事をしながら夜学に通ったものです。

昭和53年には、総理府沖縄開発庁沖縄総合事務局に出向となり、沖縄県の水需給計画やダムの調査・計画に初めて携わる一方で沖縄での生活も満喫。今も毎年のように妻の故郷である沖縄に出かけています。

建設省関東地方建設局には、昭和55年、川治ダム工事事務所に赴任で来たのが最初で、その後「国土開発技術研究センター」「農林水産省」「環境省」へ出向となるなど、国交省(建設省)以外での勤務は公務員人生全体の1/3に及び、おかげでさまざまな経験と多くの友人ができました。

昭和61年に栃木県今市市から埼玉県熊谷市に引っ越して以降、地元では、「ソフトボールクラブ」や「スポーツ吹き矢クラブ」にも所属して健康の維持と地域の人たちとの親睦を深めています。

今年72歳を迎えますが、これからも健康第一で人生を楽しみたいと思っています。

最後に、会員の皆さまのご健勝をお祈りいたします。



只今、全国行脚中！ 第二の人生がスタート？

昭和40年(1965年)生まれ

浜谷恒平さん

見坂茂範後援会
元常総国道事務所長

あけましておめでとうございます。旧年中は、会員の皆さまには大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

昨年は36年間の公務員生活を無事終了(3月に早期退職)し、2か月間の浪人生活を経て、6月からは「関東地域づくり協会」に再就職、縁あって(?)9月から現職と、目まぐるしく、またハードな一年を過ごしてまいりました。早期退職後の2か月は、今までできなかった長旅、長距離のドライブをゆっくり堪能(4月は九州、5月は東北)、心からリラックスした日々を過ごすとともに、これしばらく遠出はないと思っていた矢先、昨年9月の想定外の転職およびその後の全国行脚など。今年も7月までは「決戦」に向け、経験のない種々の業務、ならびに全国行脚が続くことになりそうです。

36年の公務員生活とは真逆に近い日々を過ごしておりますが、「心身の健康を保ちながら、自分なりに楽しむ」ことを心がけ、与えられた責務を精一杯こなすことが、今年目標かなと考えております。ただし7月「決戦」以降、どのような日々が待ち受けているのかを考えると……。まあ、なるようにしかならないですかね？ というところで、本年7月「決戦成就」に向けた皆さまのご支援、なにとぞよろしくお願いいたします。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。



「元気があれば何でもできる！」 を胸に

昭和40年(1965年)生まれ

石田武司さん

(一財)日本建設情報総合センター
元河川保全管理官

あけましておめでとうございます。

昨年4月に退職し、6月から(一財)日本建設情報総合センターに勤務しております。

この度の「年男」＝「還暦」、あっという間でした

が、この年齢に達することはまずもって両親、家族、友人、職場の皆さん、いろいろと知り合った方々に感謝です。この延長線上に今があります。

初めに近況は、車で20分程度の“彩湖”で「健康」づくり(?)のため、休日に走っています。平成4年度～平成8年度の間、担当で荒川上流工事事務所で荒川調節池総合開発事業等に携わっていたので、感慨深いです。「こんなに多くの利用者がいてすごい。こんな事業に携われてよかったなー」なんて思いながら走っています(実は、そんな余裕はなし(笑))。

流入堤付近からスタートし、左回りに、管理橋を渡って一周4.7km。完走するには思いのほかハードなコース。今では、少しずつですが体力も付いてきて、体重も減らすことができました。楽しくはないですが、せっかく続けてきたので、今後も「健康」のためと思って続けていきたいと思います。

終わりに、これからの自身のために、ものすごく大事に思える言葉があります。

燃える闘魂！アントニオ猪木氏の言葉、「元気があれば何でもできる！」です。

何をするにもまずは「健康」から。

皆さま、健康には十分ご留意いただければと思います。



第37回 道のある風景写真コンクール

私たちの生活に欠くことのできない道。小中高校生を対象とした「道のある風景写真コンクール」も今回で37回目を迎えました。

今回も日常生活での写真、動物とのふれあいの写真、工夫して撮影した写真など、いろいろな一瞬を切り取った「道」のある風景の写真を応募いただき

ました。応募作品数は3,197枚、応募者数は1,974人。昨年度に比べて、応募作品数は約800枚増加しました。

10月30日に審査会が開催され、写真家の加藤雅昭先生、太田真三先生、関東地方整備局道路部の小澤知幸道路情報管理官、当協会の後藤敏行専務理事の4人の審査により、入賞作品



が決定しました。

入賞作品は「道の駅いちかわ」など3箇所で開催を予定しています。

主催：(一社)関東地域づくり協会／協力：国土交通省関東地方整備局

金賞



小学校の部

「新1年生」

大山礼 (おおやま れい) さん
茨城大学教育学部附属小学校5年生



中学校の部

「雪の小道」

大宮龍星 (おおみや りゅうせい) さん 松戸市立第五中学校3年生

高等学校の部

「夏休みの1日」

高橋希羽 (たかはし ののほ) さん
駿台甲府高等学校2年生



学校賞

小学校	埼玉県	さいたま市立三室小学校
中学校	千葉県	松戸市立第五中学校
高等学校	山梨県	駿台甲府高等学校

銀賞

「姉妹そろってニョキッ！」
 小学校の部
 杉山心舞 (すぎやま ゆま) さん
 平塚市立大野小学校6年生



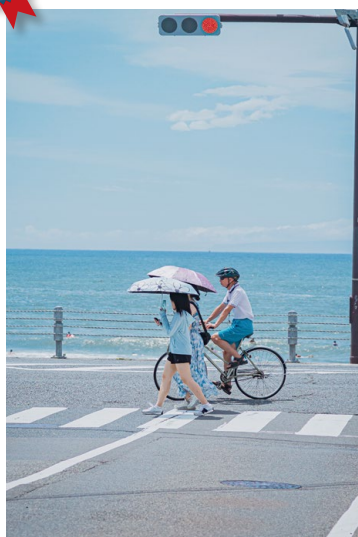
「ともだち」
 小学校の部
 笠井いずみ (かさい いずみ) さん
 市川三郷町立六郷小学校2年生



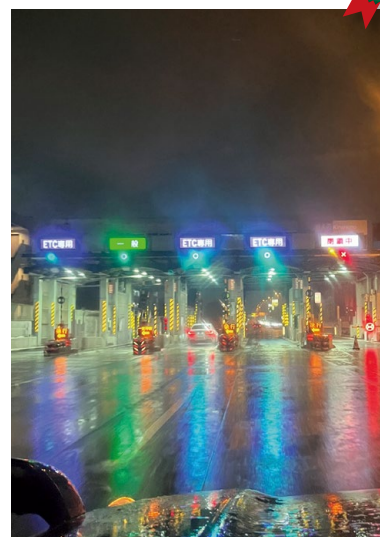
「まってってば!!」
 中学校の部
 栗原ひより (くりはら ひより) さん
 さいたま市立大砂土中学校3年生



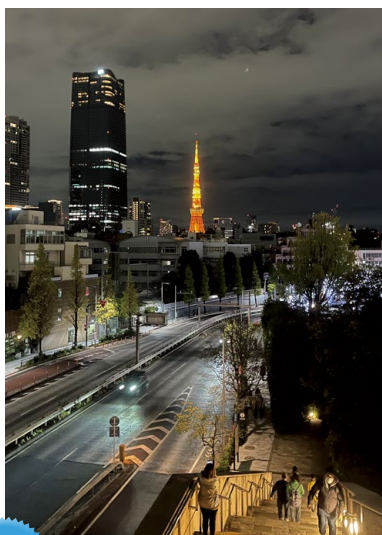
「風と渡って」
 高等学校の部
 金井大翔 (かない ひろと) さん
 群馬県立伊勢崎工業高等学校2年生



「5つの光」
 中学校の部
 高橋そら (たかはし そら) さん
 松戸市立第五中学校1年生



「東京タワー」
 高等学校の部
 三森菜摘 (みつもり なつみ) さん
 駿台甲府高等学校2年生



銅賞

小学校の部

「青空に向かって」	辻村享一郎さん (つじむら こういちろう)	横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校5年生
「農道から都会へ」	吉川季花さん (よしかわ きつか)	さいたま市立三室小学校5年生
「桜より友達が気になる!」	馬場来杜さん (ばば らいと)	さいたま市立三室小学校6年生
「お姉ちゃんだからお手伝いできるよ!」	山崎実帆子さん (やまざき みほこ)	群馬大学共同教育学部附属小学校5年生
「台風明けの海沿いの道」	溝畑晴嵐さん (みぞはた せいらん)	千葉市立海浜打瀬小学校5年生

中学校の部

「雨上がり」	松山尚史さん (まつやま なおふみ)	松戸市立第五中学校1年生
「亀とうさぎ」	木村海虎さん (きむら かいと)	さいたま市立大砂土中学校3年生
「雨上がりのY字路」	中嶋平稀さん (なかしま ひらき)	松戸市立第五中学校2年生

「青になるまでひとやすみ」

「あの雲の向こうには…」

高等学校の部

「降雪道中雪まろげ」

「分岐点」

「晩夏」

「彗星」

「朗らかな休日」

前北彩樹さん
(まえきた あやな)

柏木優明光さん
(かしわぎ ゆめひ)

浦部莉愛さん
(うらべりあ)

木村栄輝さん
(きむら えいき)

高田結さん
(たかだ ゆう)

丸山月碧さん
(まるやま 月のあ)

安達沙亜耶さん
(あだち さあや)

さいたま市立大砂土中学校3年生

瀧野川女子学園中学校2年生

埼玉県立進修館高等学校3年生

埼玉県立深谷商業高等学校2年生

栃木県立矢板東高等学校2年生

山梨県立わかば支援学校3年生

埼玉県立進修館高等学校2年生

令和3年度～令和5年度「アスファルト舗装研究会」活動報告

竹内 康・川名 太(東京農業大学)

(文責／研究会事務局)

中須賀 聡・阿部 義典(国際航業株式会社)

1. はじめに

日本の道路舗装は、主にアスファルト舗装とコンクリート舗装とに大別され、大半がアスファルト舗装で占められている。直轄国道等の重要路線におけるアスファルト舗装は、使用目標年数に基づき管理されているが、この年数を待たず早期に劣化(ひび割れ等)が発生しているケースも確認されており、これら早期劣化するメカニズムは、明確な説明に至っていない。さらに、真の舗装劣化状態(表層のみの場合や路盤までの劣化等がある)に適確に対応した舗装修繕・補修がなされなかったケースも想定され、アスファルト舗装の長寿命化を念頭に損傷のレベルに応じた適切な修繕・補修が求められている。

ここに本研究の主題を定め、アスファルト舗装の早期劣化メカニズムを解明してアスファルト舗装の長寿命化を目指すこととし、令和3年11月、「アスファルト舗装研究会」を発足するに至った。研究会メンバーは、東京農業大学・竹内康・川名太をリーダー・副リーダーとし、複数の舗装関係民間企業により発足させた。加えてオブザーバーとして関東地方整備局・国総研・土木研究所による構成とした。

当該研究の活動に際しては公益性を重視し、(一社)関東地域づくり協会の助成事業に応募し採択いただき、本稿ではこの3か年の研究成果について年度時系列的な活動内容と得られた成果について報告する。

2. 活動の記録

(1) 1年目(令和3年度)

1年目にまず最初に取り組んだ事項は、関東地



図1 研究会開催風景

方整備局管内直轄一般国道における早期劣化区間を抽出することであった。早期劣化区間は、舗装施工履歴・供用年数・路面性状調査結果等をもとに抽出し、国道4号や国道18号等の区間を選定するに至った。

これら検討活動は研究会を開催(図1)して研究メンバーの合意を得て進めた。

(2) 2年目(令和4年度)

2年目は、国道4号および国道18号の早期劣化区間を抽出し、両国道についてFWD調査やレーダー調査(舗装構成の非破壊確認)等を実施した(図2)。

これらの調査にあたっては、両国道管理者である宇都宮国道事務所および長野国道事務所の多大なご支援をいただくことができ、円滑に調査を遂行することができた。本研究における現地調査に際しては、現場を管理する機関の協力が得られたことは大変心強い環境であった。

(3) 3年目(令和5年度)

2年目の調査を経て、研究会内で国道4号の調査を深めていくべきと考え、3年目は国道4号のさらなる詳細調査に向けた検討を行った。ここでの詳細調査とは、これまで実施してきたFWD調査等の非破壊調査結果と、舗装カッターで開削してアスファルト混合物(以下、アスコン)の供試体を採取し確認する調査を意味する。

開削調査対象箇所は、劣化の大～中～小に分類することが有効と考え、FWD調査結果より損傷レベルを設定し、図3に示す箇所を対象とした。

※図3 劣化損傷の規模 ⇒ 青; 大～緑; 中～赤; 小



図2 右:FWD調査・左:レーダー調査風景
FWD調査:非破壊で路盤の損傷状況を把握する調査
レーダー調査:非破壊で舗装の損傷を把握する調査

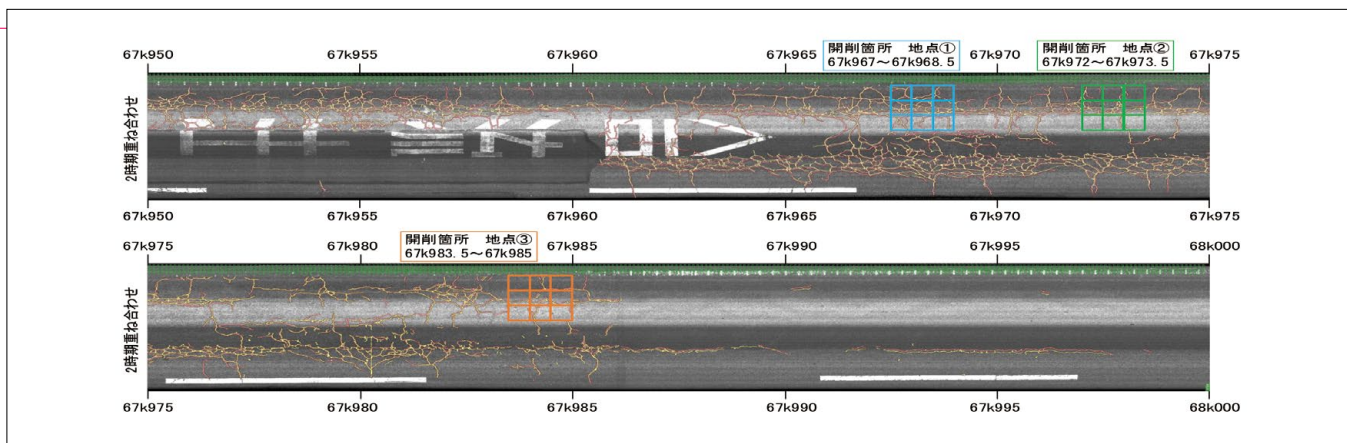


図3 クラック状況と開削調査箇所図 (国道4号下り線第1通行帯の展開図)

3. 国道4号開削調査

(1) 開削調査

前述した国道4号の開削調査結果について紹介する。

開削調査は、図3に示す3箇所について実施した。実際に開削した状況を図4に示すが、左上；位置出し・右上；舗装カッター・左下；供試体取り出し・右下；供試体運搬、を示している。開削調査では、色水によるクラック内の水浸透状況の把握や路盤上での小型FWD調査も併用し、雨水の浸透状況や路盤の健全性等についても調査を行った。供試体は、表層5cm・中間層5cm・基層5cm・As安定処理路盤8cmの計23cm厚であった。

(2) 調査結果概要

a) 層間の剥離

特に損傷の大きい青色箇所では、供試体がバラバラに壊れるなど、アスコンの損傷が著しいことが確認された。また、アスコン層間に剥離が生じており、車両荷重が円滑に下方向に分散できず、結果として早期劣化に至ったものとも推察された。

b) 上層路盤の健全性

供試体を取り出したアスコン下部面は粒状路盤であり、



図4 国道4号開削調査状況

この面で小型FWD調査による健全性について調査を行ったところ、粒状路盤の健全性に問題がないことが確認された。つまり、As安定処理路盤を含むアスコン層で劣化が進行していることが確認された。

これらのことから、国道4号の早期劣化の原因は、アスコンの層間剥離や雨水浸透によるものと判断され、路体の支持力等には問題がないことが明らかとなった。

4. おわりに (今後の展望)

本研究は、非開削での調査と開削調査とを照合したことにより舗装内部の状態が明らかになった。ここまでの研究成果により早期劣化の実態把握に向けた知見が集積され、舗装の長寿命化対応への一助とすることができた。一方、全ての道路で開削調査を実施することは現実的ではなく、非破壊で路盤状況を把握する技術が求められ、令和6年度以降はSIPの採択を受けたMWD車両(図5)による研究を継続している。



図5 MWD車両(写真提供:土木研究所)

謝辞：当該研究の実フィールドとして国道4号および18号の調査を実施するに際しては、関東地方整備局道路部道路管理課および宇都宮・長野両国道事務所には道路交通規制や路面復旧工事等の多大なるご支援をいただいた。ここに心より感謝の意を表する。最後に、本研究の発起人として、故吉沢仁氏(発足当時；関東地方整備局道路部道路企画官)の熱意・功績を欠かすことができない。ここに哀悼の意を表する。

人々の生活を守り 自然景観に調和する 新たな堰を生み出す 二ヶ領宿河原堰改築事業



前日の雨のため水は濁っているが、豊かな水を湛える多摩川の風景は、川崎市、狛江市の人々にとって憩いの風景となっている

会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、苦労や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。第52回は、二ヶ領宿河原堰改築事業に携わった石井正夫さん、坂本和雄さん、森田靖則さんと現地を訪ねました。



石井正夫さん

三谷セキサン株式会社顧問。昭和43年入省、関東地方整備局鬼怒川ダム統合管理事務所長を経て平成18年退職。



坂本和雄さん

一般財団法人水源地環境センター技術参与。昭和45年入省、関東地方整備局相模川水系広域ダム管理事務所長を経て平成19年退職。

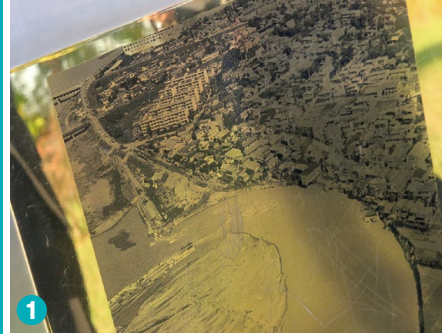


森田靖則さん

株式会社協和コンサルタンツ東京支社副理事。昭和55年入省、関東地方整備局利根川上流河川事務所副所長を経て平成28年退職。



① 多摩川決壊の碑
には昭和49年の
堤防決壊の様子
が刻まれている



②③ 宿河原堰改築の着工前と施工中の様子
(平成10年6月Ⅱ期工事完成後、右岸上空から)
(提供:京浜河川事務所)



④ 狛江市側の高水敷を歩く。改築事業にあたっては
市民団体などから多摩川の自然環境保護に関す
る意見が多数寄せられ、景観や植生、動物昆虫の
生息域に配慮して工事を進めることになった



役目を果たしつつ、景観になじむよう 2種類のゲートを組み合わせる

昭和49(1974)年9月、台風16号により多摩川の二ヶ領宿河原堰の左岸堤防が決壊し、狛江市側に甚大な被害をもたらした。狛江水害である。家屋の流失・崩壊は19棟、宅地や家財の流失被害は約30世帯、その様子は人々に大きな衝撃をもたらした*。

本誌第3号(連載第21回)ではその復旧作業について取り上げたが、翌昭和50年には市民らによる訴訟が始まり、平成4(1992)年、国側の敗訴で結審。その後、平成6年に、多摩川の治水安全度向上のため、二ヶ領宿河原堰は改築されることになった。

石井正夫さんは平成9年4月から平成12年3月まで、京浜工事事務所(当時)の副所長(技術)として、坂本和雄さんは平成10年4月から平成12年3月に工務課長として、森田靖則さんは建設監督官として平成9年4月から平成11年3月まで勤務し、同事業に携わった。

3人が携わった時期はすでに改築工事の終盤だったが、常に感じていたのは、狛江・川崎の両市民からの視

線だ。

全ては昭和49年の水害を受けての改築である。旧堰は大部分が固定堰であり、これが水害の大きな要因となった。これはもともと、二ヶ領用水に取水するために上流側に水をためる役割が主だった。

「可動堰なら早い段階にゲート操作で水量を調整できますが、固定堰は、水の流れからすれば単純に邪魔な構造物。そうすると弱いところに水は流れます。昭和49年の水害では左岸が削られました。以前と同様の被害が起きないようにしっかり手立てをしてほしいと、地元から強い要望があったのです」(石井さん)

市民からの要望は、治水面だけではなく。

坂本さんはこのとき以前にも、平成4年4月から平成7年3月に河川環境課長として同事務所に勤務した。

「多摩川の訴訟で国が敗訴した翌年から、改築について地元の皆さんに説明を行い、意見を聞き始めました。水害訴訟を受けてのことですから、注目は非常に大きかったです。安全性と同時に重視されたのが、景観の保持と植生などの環境保全でした」(坂本さん)

以前の景観と環境を保ってほしいという市民からの要

*当時の映像は関東地域づくり協会HP掲載の動画『多摩川狛江市猪方地先 災害復旧記録』でご覧いただけます。



⑤ 改築完成後の宿河原堰。右岸側は水量のこまめな調節ができる引上げ式ゲート、左岸側は周辺の景観にもなじむ起伏式ゲートとして施工した
(提供:京浜河川事務所)

⑥ 出水期間を避けて多摩川の右岸側を半川締切で施工した(平成8年5月)。旧堰の床版が利用できたことから、下の地盤を傷つけないようコルゲートセルを利用
(提供:京浜河川事務所)

⑦ 護岸には自然石(巨石)も利用。配置にリズムをつくることで、自然景観になじむ護岸になるよう工夫した
(提供:京浜河川事務所)



多摩川の流れを確保し、半川締切で施工

建設監督官として毎日、工事が続く現場に赴いた森田さんは、「これほどの規模の工事はなかなか経験できないもの。初めてのことは多かったです」という。その一つは、コルゲートセルを利用した仮締切だ。

「新堰周辺の地盤はとても強く、鋼矢板を打ち込んでの締切りができなかったのです。そこで旧堰のコンクリートの上に水流に耐えられる重さのあるコルゲートセル(中に土砂を充填してコンクリートで蓋をした円筒形の鋼管部材)を設置して水の流れを半分ずつ締め切る『半川締切』で作業ヤードを確保しました。右岸側(川崎市側)から始め、私が着任したときには、左岸側(狛江市側)を締め切って施工していました」(森田さん)

工事期間は毎年11月から5月までの非出水期。半年で施工可能な内容を組み立てて行われた。

「工程の制限がある中では、やはり仮締切が一番大変だったと、施工業者の現場代理人が話していましたね。段取りよくやらなければなりませんから」(坂本さん)

「最終的な目的物を計画通りに造り上げるには、こういった仮設構造物をいかに段取りよく施工するかが非常に重要なのです。そこをうまくやらないと本体工事に相当な遅延が出てしまいます」(石井さん)

森田さんが着任した頃は、すでに右岸側の引上式ゲ-

望である。そのため堰の形状にも工夫を凝らすことになった。上下に開閉する門扉を設置する引上式では多数の柱を建てなければならず景観が変わってしまうため、大部分を起伏式ゲートとして施工することになったのだ(右岸に約30mの引上式ゲート、そこから左岸までの150mを起伏式ゲートとして施工)。多摩川ほどの規模の大河川では採用されていなかった起伏式ゲートだが、調査を重ね、ここでも使用可能だと技術的検証を行ってのこと。負圧対策として起伏式ゲート上部に突起を立てたが、これが下部に水が落ちるときに水面に白い飛沫を立て、美しい流れの景観を生むことになった。

また、計画段階では新たな堰は100mほど下流に建造する計画だったが、下流部の土丹層にある遺跡を保全してほしいという要望から、旧堰から約50m下流の、現在の位置に造ることになった。

「右岸の護岸にはコンクリートブロックだけではなく自然石(巨石)も配置しました。現地で、施工者を集めて意図を説明したんですよ。もちろん機能は完璧にしなければなりません、それだけではなく見た目も重要。図面通りに並べるのではなく、将来的にはなじむことで安定するように配置しました。これも景観のためです」(石井さん)

「土木の施工者だとそういった感覚が難しいので、石工さんに来てもらい組み合わせを決めてもらったと記憶しています。単調にならず、それでもグラグラしないように配置をしました」(森田さん)



8



9

89

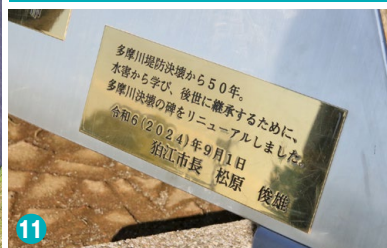
堰の管理橋から上流を望む。新しい堰は、旧堰から約50m下流に設置された。上流、左手に引き込まれているのが二ヶ領用水の取水口



10

101112

昭和49年の多摩川堤防決壊（狛江水害）から50年となった令和6年9月、「多摩川決壊の碑」がリニューアルされた。時を経ても水害からの学びは受け継がれていく



11



12

トは完成していた。そのため、出水の際にはゲート进行操作して水流を調節するのも森田さんの役目だったが、これが一番神経を使ったという。

「川の半分を締め切っていますから水位が上がるのも早く、大雨でなくてもすぐにゲート进行操作しなければならないことが多かったです。専用のパソコンを家に置いて、夜中でも雨が降ったら確認することが必要でした。ゲートの操作は私と補助員の2人体制で行いましたが、操作が始まると終了まで数日かかることが常だったので、事務所からの応援が本当に助かりました」(森田さん)

狛江水害を経て、地域を守る新しい堰に生まれ変わった

多摩川は現在の河川整備計画流量（石原地点）として毎秒4,500m³を流すような大きな河川である。この規模の河川は日本にはいくつもあるが、両サイドがともに大都市という箇所はそれほど多くはない。大都市の中の河川での工事は、それだけ人々に注目されているということだ。

「それだけに、完成後の治水上の安全性だけでなく、工事に携わる皆さんの安心安全にはとても気を使いましたね」(石井さん)

完成直前に洪水があり、一時はひやっとしたと石井さんはいうが、実際に負荷がかかったときにもしっかりと機能を果たすことが確認できた。

市民からのさまざまな要望を耳にしてきた坂本さんは

「堰のデザインは景観によくなじんでおり、良いものになったと思います。水面の高さも見た目では元と同じ程度になり、流れ落ちる水音も従前に近いものになりました」と振り返る。

竣工式が行われたのは平成11（1999）年3月27日。堰の管理施設であり、水害について市民に伝える「二ヶ領せせらぎ館」にもなっている管理棟の前で、竣工式が行われた。前日に雨が降ったため、森田さんたちは式典が始まる直前まで、会場内の水たまりを砂で埋めて回った。

新たな二ヶ領宿河原堰は、完成から10年後の平成22（2010）年に土木学会デザイン賞を受賞。2種類のゲートを組み合わせて機能を高めながらも、多摩川の原風景を残したことが評価された。改築にあたっての配慮が評価された形。3人は改めて、そのことに喜びを感じると語る。

令和6（2024）年は狛江水害から50年、堰の改築開始から30年である。

「機能や管理のしやすさにばかり注力すると、人々の生活になじみ、足を向けてもらえる河川環境からは遠ざかってしまいます。危ないから近づかないでというのではなく、多くの人々にさまざまな形で親しんでもらえるものでないといけないのです。安全なものを提供することは当然ですが、二ヶ領せせらぎ館の市民利用やゲート構造および護岸の自然石など、そのために行った工夫は今でも十分に生きていると思います」(石井さん)

陸路と水路が交差する 土浦宿



江戸時代、東海道などの街道に
設けられたのが宿場です。

旅人を迎え送り出した宿場の古今の様子を
関東地方の各地に訪ねるシリーズ。
第16回は水戸街道11番目の宿、土浦宿です。



江戸の昔の面影を残す中城通り



土浦藩主土屋家4代当主土屋篤直が描いた「土浦道中絵図」より、土浦宿付近（土浦市立博物館所蔵）

霞ヶ浦を望む街道きっての宿場町

江戸と水戸を結ぶ水戸街道は五街道に続く重要な街道です。開通したのは慶長9(1604)年。全長は約116km。水戸街道は参勤交代の道として東北の仙台、秋田、津軽などの大名が利用しており、江戸定府であった水戸藩も江戸との連絡に使っています。土浦宿は千住宿から数えて11番目の宿場。水戸や千住に次ぐ水戸街道きっての宿場として栄えました。

関ヶ原の合戦後、松平信一が土浦城に入り土浦藩が成立します。松平信一は土浦城（亀城）と城下町を整備。水戸街道が城下を貫き、土浦宿が設けられたのもこの時代でした。土浦宿はたちまち発展します。街道に沿って田宿、中城などの町家が形成され、商店や問屋が生まれました。旅籠、船宿などの宿泊施設や茶屋などの飲食店も多くありました。

土浦宿がこんなに繁栄した背景には、水戸街道を往来する人や物の他に、霞ヶ浦を利用した水運が盛んだったことが挙げられます。霞ヶ浦につながる土浦城下は水の都でした。桜川、旧桜川（川口川）、田町川などの他、小さな川や運河が城下に張り巡らされていたのです。そこを物資輸送の高瀬船が往来し、周辺地区のみならず東北一帯からの物資も集められ、江戸方面に運ばれていました。土浦宿は陸運、水運の中心地だったのです。

利根川東遷が大きな影響をもたらす

土浦宿一帯が江戸との水運で隆盛することになったのは、利根川の東への流路変更がきっかけでした。元々、利根川は東京湾に注いでおり、そのため現在の埼玉県や東京都の東部地区は氾濫が多発し、大湿地帯と化していました。その状況を解消しようと、江戸に入府した徳川家康は利根川を銚子沖の太平洋に流れ込むように流路を変える大規模な工事を行い、承応3(1654)年に完成しました。利根川東遷です。

利根川東遷は土浦宿を含む霞ヶ浦一帯にあった河岸に大きな影響をもたらしました。江戸と水路で結ばれたからです。霞ヶ浦、利根川、江戸川などを結ぶ水運は、大量の物資を安全に運べるルートでした。運んだのは四丁櫓を備え100俵以上の米を積める大型の高瀬船です。江戸に運ばれた物資としては土浦城下で作られた醤油、米、雑穀、薪など。帰りには塩、酒、小間物、古着などが積まれました。

享保12(1727)年に藩の援助により開設された土浦城下旧桜川（川口川）の川口河岸は、土浦宿の水運を一層活発にしました。元禄の頃にはすでに7軒の船問屋があり、旧桜川や田町川沿いには多くの船宿や船頭相手の飲食店がありました。土浦は港町でもあったのです。



江戸時代に建てられた土蔵造りの矢口家住宅



土浦まちかど蔵・大徳。江戸時代は呉服店だった

商業の町であり文化の町でもあった

繁栄した土浦宿には多くの商店や問屋、旅籠などがありました。明治初期の調査によれば、土浦城下を貫通する水戸街道およそ900mの間に、合計400軒余りの店舗が軒を連ねていたといいます。業種としては穀物商や荒物店、乾物店、飲食店など。他にも医師や薬屋、書店などがあり、文化や技術の町でもありました。こうした商店街の中核となったのが中城町です。現在でもその昔の雰囲気が濃厚に残りますが、慶応4(1868)年には66軒余りの商店がありました。

物資の集散地でもある土浦宿では、市場も開設されました。毎年3月には中城天満宮では大規模な馬の市(駒市)が開かれています。農村の農耕馬や宿場の荷馬などが取引され、記録によると売り馬数は正徳元(1711)年には767頭、売買代金は1,600両余りに上りました。土浦宿の北端である真鍋と南の出入口である銭亀橋では新大市が開かれ、十月大市として親しまれました。他に東崎町の鷲神社境内でも市があり、これらの市では碗や小間物、木綿などの生活用品を中心に取引され多くの人を集めました。

このように、土浦宿は陸路と水路が交差する宿場として大いに栄えました。その面影は旧水戸街道である中城通りに残る古い商店などでしのぶことができます。



開業150年以上の蕎麦屋・吾妻庵総本店



水の都をしのばせる
土浦城址(亀城公園)



土浦港から霞ヶ浦を望む



国内初の商業用水力発電ダム

栃木県日光市の国立公園内に悠然とたたずむ鬼怒川発電所黒部ダムは、大正2(1913)年に竣工した日本で最初の発電用コンクリートダムです。構造形式は曲線重力式ダムで、半径121mのアーチ型平面形状と、越流部に15mの水平部を有していることが特徴として挙げられます。

鬼怒川の水力発電計画は、明治時代後期、大分県出身で政財界の有力者だった利光鶴松によって始まりました。下滝発電所(現鬼怒川発電所)から東京市電(現東京都電車)への送電を目的として進められたこの計画の試金石として位置づけられたのが黒部ダムでした。設計の指導は湾岸工学の父として著名な廣井勇が行い、当時の堤高は33.9m、堤防長は150mで洪水吐は21門設置されていました(後に1門増設)。黒部ダム建造後も上流に建設省(当時)川俣ダムが設置されるなど発電設備が増強され、高度経済成長期にあった日本の重要電源としてその役目を担いました。

明治44(1911)年2月に着手された黒部ダムの工事は、

当初は堤高38.2m、調整池容量4,171,000 m^3 の規模として計画されていました。しかし兩岸上部の基礎部分に不良箇所があったため、その規模は若干縮小されています。

建設の作業はほとんどが人力であり、資材運搬のため今市から大笹峠(現在の栃木県道245号栗山今市線)までの約12kmを人馬が通れるように拡張し、そこからダム建設地点までは索道を敷設してセメントや石材などを運搬しました。ダムの工事を請け負ったのは早川組で、作業員の家族を含む三千数百人が現場近辺の民家に分宿し、労働にあたりました。

建設は石を一つ一つ人力で豊築する過酷な作業で、河原で採った岩石を作業員の家族が手で砕いたともいわれています。また、生活環境も彼らにとって非常に厳しいもので、集められた作業員の2割ほどが常に負傷や疫病で休業しているという状況でした。そうまでしてでも、いち早く送電システムを完成させることが、当時の計画者たちの信念でした。工事全体を通して亡くなった無縁仏の数は数百人にも及び、現在は供養塔や追悼碑が現場近辺に建てられています。

国立公園の紅葉と
黒部ダム



関東の土木遺産 第53回

国立公園にたたずむ、本邦初の商業用ダム

鬼怒川発電所 黒部ダム

栃木県

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。

それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第53回は栃木県日光市にある鬼怒川発電所黒部ダムです。



美しい曲線を描く
アーチ部分



景観に配慮した造形美は技術の結晶

国の重要な電源設備としてフル回転した昭和末期、洪水吐のゲート各部の老朽化やコンクリート材令が長期化したことから、約70年が経過した昭和62(1987)年10月に大規模な改良工事が開始。主な改造点として、22門あった洪水吐が8門に、堤高は33.91mから28.70mに改造され、堤体積も80,542m³から77,822m³にやや縮小されました。

そして改造にあたり特に重要視されたのが、国立公園内に位置していることに対する景観への配慮でした。土木構造物を建造する際、まず求められるのは築造条件に十分見合った土地の見極めと、建造物の安全性および機能性ですが、黒部ダムに改造時には、それに加え自然景観への配慮の意識が全面に打ち出されました。黒部ダムが位置する日光国立公園は、昭和9(1934)年12月に誕生したわが国最初期の公園で、福島・栃木・群馬の3県にまたがる総面積は114,908haと、本邦屈指の国立公園です。区域の大半は那須火山帯に属する山岳地であり、山麓には雄大な高原が広がり、火山活動に起因する湖沼や

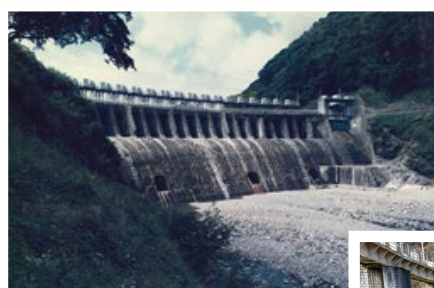
瀑布、秋には美しい紅葉が見られる溪谷などが点在しています。そんな美しい景観を壊さず、またその空間になじむ建造物を目的に、技術者たちは持てる技術を注ぎ込みました。その施策の一つが、建造当初の石張りの再現です。

大正時代、多くの強制労働者たちの手によって積み上げられた石の堤防。その石張りを再現することは、同時に歴史ある国立公園の自然景観になじませることもつながりました。建造当初から継承された曲線部分にも優美な湾曲を生かした造形美が表れています。土木学会関東支部選奨土木遺産選考委員を務める足利大学非常勤講師の福島二郎氏は黒部ダムの全景、その機能美を高く評価した上で、「巨大な人工構造物でありながら違和感なく自然の中に溶け込んでいる。地元の住民たちにとっても見慣れた景観として、そこにあって当たり前のもので受け容れている。建設に携わった土木屋の矜持を強く感じる素晴らしい土木遺産です」と語ります。

大正と昭和、それぞれの時代で魂が込められた技術者たちの技の結晶は、建造から100年以上が経った今でも、色褪せることなく管理・継承されています。



改修された洪水吐



改修前の黒部ダム
(写真提供: 東京電力リニューアブルパワー)



改修にあたっては
以前の石張りが再現された

背面側。奥に見えるのが常用洪水吐



なだらかな曲線が
よくわかる



改修記念碑。
大きな歯車は改修前のダムの一部

会員のひろば

このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです

朝日岳にて



『協会だより』の「会員のひろば」執筆依頼を受け、何とか書けそうな今の自分の趣味について考えてみた。ゴルフはやらないし、釣り・バイク・ジョギング・山登りなどいくつかあるが、最近どれもあまりやっていない。とりあえず誌面に収まる範囲で一つずつ書いてみようと思う。

まず魚釣り

鹿児島出身と言ってきたが、私は小・中・高校1年まで千葉県館山市で育ち、子供のころから釣りにはよく行っていた。投げ釣りもするが今は船釣りが多い。アジ・タイ・ヒラメ・カワハギ・イカ・キンメダイなど竿や仕掛けが異なるさまざまな魚種を釣ってきた。

夜中1時頃家を出て、夕方帰ってきて自分で魚をさばくので、風呂にも入りたいし、波をかぶり潮だらけのカップや釣り道具も洗いたい体力が残っていない。たぶんこれはゴルフより体力的に厳しい趣味だ。さばく魚の数が少ない大型魚狙いが中心になり、今はほとんどヒラメ釣りである。

醍醐味は、魚がかかって引いているときのやり取り。これが楽しい。おいしいお刺身が食べられるし、お土産があれば妻のご機嫌も悪くならない。

私の趣味



牧角 修

いであ株式会社 技師長
元地方事業評価管理官

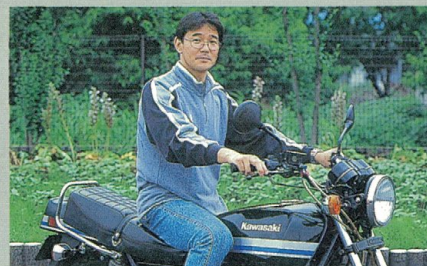
次にバイク

館山の高校1年時代に原付免許を取った。2年から鹿児島の高校に編入学したが、下宿生や鉄道・バスもない遠方から通う生徒もいる地域の進学校で、バイク通学が認められていた。ホンダのDAXというバイクを買ってもらい、私もバイク通学。それから一時のブランクはあるが、もう50年近くずっとバイクに乗っている。

高校・大学は通学の必需品であったが、社会人になり「ただのオヤジの趣味」となっても乗り続けている。多くのバイク仲間は、就職・結婚や車購入を機にバイクから離れていった。

大学時代は125ccのバイクで、北海道から奄美大島まで行った。当時合格率2%といわれていた大型免許に挑戦し8回目での合格を機に、当時市販の最大排気量のナナハン(Z750FX-Ⅲ)を購入し、その後27年所有していた。バイク雑誌の取材も受けた。そのバイクも盗難にあい、ついにバイク卒業と思っていたが、数年後、姉の夫か

ちょうど20年前に新車で購入し 何度か危機もあったが車検を切らず ずっと乗り続けてきた牧角さん



取材に協力してくださった牧角修さん(42歳)は埼玉県草加市にお住まいで、職業は公務員。中学時代からオートバイに興味を抱き、16歳のときに原付免許を取得し、18歳から21歳の間に小型／中型二輪免許を取って限定解除も果たす。車歴は、ダックス50、RD125のあと、'82年5月にZ750FXⅢを購入。当時はCB750FやGSX750Sカタナなど魅力的なナナハンが多かったが、牧角さんはカワサキのZ750FXに憧れていた。FXⅢを選んだのは、その初期型のFXと大きく変わらない形で車体がコンパクトになっていて乗りやすそうだったうえ、Z750GPが発売された直後で価格が安くなっていたからだという。

ゼファー750が出たときは乗り換えを考え、1年車検になった年には手放そうかと思ったし、'94年ごろには暴走族に盗まれたが比較的早く見つかり、族仕様になっていたのを直してもいる。また、シートレザーを張り替えたり、フロントブレーキまわりを小変更しているが、スタンダード然とした外観を保っており、エンジンは故障知らずで調子がいい。若いころは何にでも使っていたが、最近は秩父方面の山に出かけるのが楽しいとのことだ。

ら200ccのオフロードでよければあげ
るよと言われありがたく頂戴し、若干
のブランクを経てまた乗っている。今
でも年数回秩父の山の中を一人で走っ
ている。

その他もろもろ

誌面が少なくなってきたので、その
他まとめて。コロナ禍以前はマラソン
(10kmやハーフ・駅伝等に参加)、山登
り、また土日にはプールでよく泳いで
いた。これらも復活したいと思う。

記憶力・視力の衰え、高血圧、肩・

腰・膝の痛みと標準的な老化の症状
を一通り経験し人間ドック結果表の数
値がいくつも基準値を超
えているが、杖や補聴器
なしで普通の生活が長く
できるよう病気と生活に
は気を付けていきたいと
思っている。ある程度健
康でいないと体を動かす
趣味ができなくなるから。
高齢化社会の日本、老化
は仕方ないので皆さんも
ご自愛ください。

戸田マラソンにも参加



会 員 情 報

新会員をご紹介します 令和6年11月1日以降、新しく8名の方々が入会されました。これからよろしくお願いいたします。(敬称略)

氏名	現勤務先
長内 博昭	河本工業(株)
清水 孝男	(株)サンテックインターナショナル
遠藤 和重	(一財)日本建設情報総合センター
森戸 義貴	(一社)日本道路建設業協会

氏名	現勤務先
前佛 和秀	(一財)道路交通情報通信システムセンター
竹田 正彦	(一財)建設物価調査会
河南 正幸	(一財)橋梁調査会
武藤 聡	(一社)関東地域づくり協会

お悔やみ申し上げます 謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
長田 紘二	令和6年4月	川崎国道 工務課長(再掲)
岡部 克安	令和6年9月	北首都国道 建設専門官
長坂 清吉	令和6年10月	宇都宮国道 事務所長
関口 利昭	令和6年10月	川崎国道 事務所長
松橋 幸雄	令和6年11月	東京湾調 事務所長

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
吉岡 光雄	令和6年11月	河川部 水政調整官
大工保 昇	令和6年11月	高崎 庶務課長
山本 洋司	令和6年12月	関東技術 副所長
染谷 悦男	令和6年12月	荒川下流 経理課長
足立 敏之	令和6年12月	国土交通省 技監

編集委員会だより

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。本年も広
報誌『協会だより』をよろしくお願いいたします。

毎年この時期に、近所の園芸直売所で6号鉢のシクラ
メンを購入しています。この直売所は大型のビニールハ
ウス2棟で50種類のシクラメンを栽培していて、お花屋
さんでは見たことがない色や形の花がハウス一面に美し
く並んでいます。まずはハウスの中を一周し花の色・形を
絞り込みます。次に花の咲き具合。満開ではなく8分咲
きぐらいで、次に咲く蕾をたくさん持っているシクラメ
ンを選びます。意中のシクラメンを決めるのに30分。大
切に連れて帰ります。

シクラメンは地中海地方が原産の球根植物で、高温多
湿を嫌います。「水やりの仕方」「置き場所(適温8〜15℃)」
が重要ですが、いつも視界に入れておきたい気持ちから、
暖房の効いた居間で育てています。1カ月もすると花の茎
がしおれはじめ、「水不足」だと思ひ込み過剰に水をやり、
結局根腐れを起こしてしまします。庭の片隅にはプラス
チック製の茶色の6号鉢がいくつも転がっています(笑)。
今年は夏越しさせて1年後にまた花を咲かせるため、
適温を重視。置き場所をいつも視界に入らないが果立っ
た子供部屋にし、大切に育ててみようと思っています。

(編集委員 K・O)

編集委員

● [関東地域づくり協会]

有馬正吾
大柴公彦
澤田晋
高橋岩夫
辰野剛志
丸山貴志

[会員]

浅古勝久((株)熊谷組)
吉田成人(いであ(株))

関東の道の駅

緊急時の拠点となる 河川防災ステーションと 一体となった道の駅



道の駅
「富士川」



国道52号と中部横断自動車道(増穂IC)から利用できる道の駅「富士川」

道の駅「富士川」は平成26年に開業。令和3年に防災道の駅に認定されました。平常時は、穏やかな富士川の流れ、山々の美しい風景を楽しむことができる道の駅「富士川」。地元の人々に、生活に欠かせない場所として愛されています。

開業以来、地元の人に愛されてきた

平成26年に開業した道の駅「富士川」は、甲府市内から県南へと至る国道52号沿い、釜無川と笛吹川が合流して富士川となる地点にあります。「利用客の6割が地元の方で、日常的に旬の野菜を購入したり、犬の散歩などの憩いの場として利用されています」と話すのは道の駅富士川代表取締役社長の藤巻睦久氏です。

国道52号と並走する中部横断自動車道も順次整備され、増穂ICに直結する道の駅「富士川」には、静岡方面や長野方面などの遠方から訪れる人も徐々に増えています。特に8～9月は地域の特産品であるブドウを目当てに大勢の人がやってきます。比較的小規模の農家900件近くが、「富士川」での販売登録をしており、朝から次々とブドウが運び込まれ、販売スペースは大忙し。広々とした駐車場もいっぱいになるほどのにぎわいになります。

舟運で栄えた富士川町には江戸時代から続く老舗があり、地域の食材を生かした和菓子や加工食品も多数。道の駅で働く地元の皆さんによって、新たな商品も続々と開発されています。地元の人々に愛される道の駅「富士川」。その特長はそのままに、新たなお客さまにも利用してもらえ

るよう発展させていきたいと藤巻氏は語ります。

河川防災ステーションに併設された道の駅

富士川は、古くから水害が頻発した地域でもありました。そのため道の駅「富士川」は河川防災ステーションと一体で整備されており、大規模災害時には道路利用者や地元の人々の避難所としてだけでなく、広域的な防災拠点となるよう施設が整えられています。河川防災ステーションの広大な敷地には、ヘリポートや、緊急復旧用資材である土砂や土のう、消波ブロックが備蓄されています。長野や静岡で水害などが発生した際は、消波ブロックが中部横断自動車道を経由して運ばれていきます。災害時の主要幹線道路となり、広域支援の拠点にもなる予定。

「道の駅施設も2棟に分かれており、南棟は水防センターとして、2階に発災時の対応のための司令室などとして使用できる会議室、1階に備蓄倉庫を備えています」と、藤巻氏。これまでもマルシェや多目的広場での各種のイベント開催時には消防署や自衛隊もブースを出展してきましたが、さらなる連携を模索中です。「発災時にお世話になる皆さんとともに、より防災意識を高められるような催しなども企画していきたいと考えています」(藤巻氏)

河川防災ステーションの多目的広場は、平常時はイベントなどに利用している。写真は甲斐犬の品評会



8～9月はブドウの季節。大勢の人がやってくる

道の駅富士川の
藤巻睦久代表取締役社長



若い人にも来てもらいたいと新たな商品開発も。バウムクーヘンは富士川町産の米粉と卵を使用しスタッフが焼き上げる



水防倉庫には災害用トイレや毛布、発電機などが保管されている



高速道路のパーキングエリアの後方には、この場所で作られた消波ブロックがそのまま保管されている